

研究主題

「持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業」（第4年次）

1 研究の基本的な考え

◆主題のとらえ

『持続可能な社会の実現を目指し』

持続可能な社会とは、現代社会に生きる人々の欲求の充足だけではなく、将来の世代を生きる人々のニーズまで考えることで実現される社会である。そのような社会の実現を目指すためには、一個人・一企業・一国家の利益だけを追求しては望めない。利害関係や世代をこえて、互いの主張を理解しようと努め、よりグローバルな視野に立つて考えることでこそ、持続可能な社会が実現できる。

『学びを問い合い』

問題解決学習をととして、子供自身が自分と社会事象とのかかわりに気づき、友と学びを共有する中で、自らの考えを問い直し、社会事象を自分のこととしてとらえることにつながる。

『自己の責任を考える』

主体的に社会とかかわる能力は、公民的資質に含まれる大事な要素である。主体的に社会とかかわるためには、社会に対する自分自身の責任を明確に自覚することが必要不可欠である。つまり、社会事象に含まれる問題が、自分とかかわりのある問題として子供にとらえられてこそ、自己の責任を考えることができる。

本研究主題1年次では、第6学年「3人の武将と全国統一」の学習で、「波乱万丈の戦国武将戸田氏」という単元を構想した。そこでは、戦国武将それぞれが究極の決断（まさに生きるか死ぬかの選択）をくり返して生きていかなければならなかった時代が戦国時代であったことを子供に気づかせることができた。そして、先人の様々な決断の積み重ねが歴史であり、自分たちが下す決断がこれからの歴史をつくっていくのだという意識をもたせるとともに、よりよい生き方をめざすための決断の重要性について考えさせることができた。また、子供の問題意識に沿った自作資料の提示により、子供は、いろいろな立場の人の思いや状況をより多面的に追及することができた。さらに、地域とつながりの深い歴史上の人物を取り上げ、人物の思いを深く追及することで思いに寄り添い、決断の重大さや責任の重さについてとらえることができた。

2年次においては、第5学年「わたしたちの生活と食糧生産」の学習で、「ウズラ日本一を守れ!」という単元を構想した。そこでは、地域の畜産業を教材化し実践を行った。平成21年2月に豊橋のウズラ農家で確認された鳥インフルエンザウイルスの影響で、地域の養鶏業者は飼育していた多くのウズラを殺処分せざるを得なくなった。そこで、養鶏業界で共に生き残るために、自己犠牲をはらってでも日本一の「豊橋ウズラ」ブランドを守り、巻き返しを願って日々奮闘している生産者の姿を子供にとらえさせた。さらに、子供が地域の中心的な養鶏業者の生き方にふれ、その人の思いに寄り添うことで、生産に携わる人々が現在だけではなく、将来にかけての業界全体の発展を目指していることに気づき、持続可能な社会の実現とは何か、それぞれが考えるようになった。

3年次では、2年次の研究をさらに深めるために、第5学年「わたしたちの生活と食糧生産」の学習で、「ハウスでがっちり!〜日本一の大村ラディッシュ〜」という単元を構想した。地域では、狭い耕地面積を最大限に活用した施設園芸が広く行われている。その中でも、地域のラディッシュ生産者が中心となって組合を組織し、協力して生産・出荷している人々を教材化することで、地域で作られたラディッシュを日本全国に流通させ、消費者の信頼を得るまでに費やされた生産者の様々な努力や工夫、苦労について気づかせることができた。さらに、厳しい品質管理や出荷体制を組合で維持していることに子供が気づくことで、日本一のシェアをもつ「大村ラディッシュ」というブランド野菜が、一個人の力ではなく、地域のラディッシュ農家の協力により為し得たということをとらえさせることができた。

4年次にあたる本年度は、第6学年「世界の中の日本」の学習で、「東田海外協力隊」という単元を構想した。平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、震災後、世界163もの国と地域から日本に対する支援が寄せられた。このように多大な支援を日本が受けることができた要因として、長年にわたり行われてきた日本の開発途上国に対するODA（政府開発援助）があげられる。ODAの中には、JICA（日本国際協力事業団）が行っている青年海外協力隊も含まれている。現隊員や隊員OBとの交流をととして支援の実際を知り、平成9年以降減り続けているODAのこれからについて子供に考えさせることで、日本が将来にわたって発展していくためには世界とのつながりが不可欠であり、国内の問題だけでなく、途上国への支援も重要であることに気づかせたい。

2 本年度の授業研究

◆研究の仮説

本年度の授業研究において、次のような仮説を設定する。

- ① 青年海外協力隊員とOBとの交流や調べ学習をととして、日本の国際支援の意義や現実を見つめ直すような単元を構成すれば、広い視野をもち、共に助け合っていく社会の重要性に気づくであろう。
- ② 個々の問題意識にそった自作資料を用意することで個々の考えの足場づくりをより確実に行い、個々の考えを効果的に関わらせる場の工夫をすれば、子供は考えを再構築したり思いを深めたりすることができるだろう。
- ③ 日本の途上国に対する支援の重要性や問題点を知り、国際社会の中で日本の果たすべき役割を考えさせていけば、将来国際化が進む社会を生きていくための「自分なりのかかわり」を考えることができるだろう。

◆研究の手だて

研究の仮説を実証するために、次の手だてを具体的に講じ、実践を行う。

① 共生の重要性を認識するための学習活動の展開

- ア) 東日本大震災に対する世界各国の日本に対する支援をきっかけに、日本の開発途上国に対する支援に目を向けさせ、これからの日本の支援のあり方について追究していく単元構成にする。
- イ) 日本や開発途上国の現状、日本の国際支援のあり方が理解できるような自作資料を用意する。

② 友達とより深くかかわるための、個々の確かな足場づくり

- ア) 個々の確かな足場をつくるために、青年海外協力隊とOBとの交流活動を取り入れたり、朱書きや対話・教室掲示で思考の整理をしたりする。
- イ) 個々が友達と多く話し合い、より深くかかわるようにするために、問題を追究する際にグループ討論の場を設定する。

③ 国際支援について、自分なりのかかわり方を考える場の設定

- ア) 開発途上国では多くの人々が貧しい生活を送っている事実や、日本の財政の危機的な状況といった現状をふまえたうえで、日本の国際支援を見つめ直させ、自分なら何ができるかを考えさせる。

3 単元構想

【教師支援】

※1 先進国だけではなく数多くの国が震災で被災した日本を助けてくれたことを感じさせるために、総合的な学習で使ったGNI別の色分けをした世界地図を掲示し、支援してくれた国にシールをはるよう指示する。

※2 調べ学習の意欲を高めるために、日本がしていることを予想させ、そこから図書を用いた調べ学習に移行する。

※3 子どもの調べたいことを調べられるようにするために、国際協力関係の図書を用意する。

※4 日本が途上国のためにしていることの内容をすっきり理解させるために、板書で人＝技術面での支援と金＝物での支援をわけ。

「難民に思いを寄せてー緒方貞子ー」(道徳)世界の紛争地帯に自らでかけて難民を助けようとする姿はカッコいいな。

※5 子どもの、協力隊員と交流したいという気持ちを後押しするために、豊橋市のホームページにザンビア通信を掲載している金田さんとは連絡が取れることを伝える。

※6 現地にいる金田さんの話を聞くために、スカイプや写真で交流をする。

※7 青年海外協力隊に参加することの意義は、人によって違うことを理解させるために、金田さん、兵藤さんの話を聞く。

※8 子どもに協力隊で得た経験が日本の社会にも還元できることを理解させるために、兵藤さんの話を聞かせる。

※9 子どもに年々日本のODA金額が減っていることを理解させるために、折れ線グラフを用意し読み取りさせる。

※10 子どもに、日本がたいへんな時だと気づかせるために、自作資料を用意する。

※11 途上国支援の意義を捉えさせるために、自分なら本当に貧しい国に支援したいか、日本との関わりが深い国に支援したいかを考えさせる。

東日本大震災で日本を支援してくれた国にはどんな国があるのかな①調べ②意見交流③調べ④話し合い

・世界163ヶ国・地域が日本に対して支援の意思を表明しているんだって。
どんな支援をしてくれたんだろう

・近くの国だけでなく、アフリカやアジアの途上国までも支援をしてくれているね。
※2
なんで途上国が日本を支援してくれるのかな

・多くの国が義援金を送ってくれているね。

・HPで調べたら、「日本の今までの支援に感謝している」という言葉が多く見られたよ。

日本が今まで外国に支援をしてきたから、いろいろな国が助けてくれたのかな。

日本と世界はどのようにつながっているのだから

※3.4

日本は途上国にどんなことをしているのかな⑤調べ⑥発表

・技術を伝える

・医者を送る

・学校を建てる

・お金をあげる

・古くてもまだ使えるものを送る

・日本人がコスタリカという国で野菜の作り方を教えているみたいだよ。
・青年海外協力隊の活動ってあるよ。

・日本製のバスをモンゴルに送っているみたいだね。
・日本が援助しているお金は世界で一番だったみたいだね。

・青年海外協力隊って何だろう。

・なんで日本は途上国を支援しているのかな。

※5
・どういう国にどれくらいお金を支援しているのかな。

青年海外協力隊について知りたいな
⑧調べ⑨話し合い

なんで日本は途上国を支援するのかな
⑩調べ

・JICAという組織が途上国に日本人を送っているみたいだね。途上国からの要望があるんだね。
・青年海外協力隊で途上国に行く人は日本語・理科・算数の先生や、農業、病気の対策など、いろいろな仕事があるね。

・日本は島国で、食糧の半分以上を輸入に頼っているね。その内のさらに半分は途上国から輸入しているんだ。だから、途上国に支援をして、つながりをもっているんだね。

日本は世界とつながりがなく困るんだね。

青年海外協力隊員で働いた人の話を聞きたいな
⑪⑫交流

どういう国にどれくらいお金をだしているのかな
⑬調べ⑭発表

※6.7 協力隊員の話を聞いてみたいな。 ※8

金田さん
ザンビア滞在中
・途上国の発展のために、教育をしているんだね。教育が途上国の発展につながるんだ。

兵藤さん
サモワOB会代表
・青年海外協力隊に使われるお金は減っているんだね。途上国のための活動なのにね。

・年間に7000億円の支援を途上国のためにしているね。
・国が一年間に使えるお金の1.5%が途上国のために使われているね。
・181ヶ国も国に、日本はお金をあげたり貸したりしているみたいだよ。

でも、兵藤さんは支援のお金が減っているって言っていたね。なんでこんなにいいことを減らすのかな。

途上国のために働いていたいへんなことも多いみたいだけど、やりがいがあるんだね。兵藤さんは日本の支援が減っていると言っていたけど、日本は途上国に対してどれくらいの支援をしているのかな。

日本の途上国支援はどうして減っているのかな⑮調べ

※9.10

・日本には借金がたくさんあるし、東日本大震災の復興で多くのお金がかかるんだね。日本はお金がないから、消費税を上げるってニュースでも言っているよ。

日本は今たいへんな状況なんだね。こんなときに途上国を支援していいのかな。

日本は、途上国支援を続けるべきなのかな⑯まとめ⑰話し合い

※11

・支援を減らすのはやめた方がいいと思う。理由は、日本が貿易で成り立っている国だから。開発途上国との関係がなくなったら今の生活はできない。(続けるべき)

・開発途上国には貧しい人が多いからという意見があったけど、日本だって、借金や東日本大震災の復興で困っているから、支援は減らした方がいいと思う。(続けるけど減らすべき)

・今の日本の途上国支援は、関係の深い国に多くのODAを供与しているけど、個人的には本当に困っている貧しい国にODAをしたい。

日本は今たいへんな状況だね。途上国への支援は減ってしまうかもしれないけれど、世界とのつながりは大切にしなないと私たちも困ってしまうね。私たちにできることってなんだろう。

私たちにできることって何があるだろう⑱調べ⑲話し合い⑳活動

・国際連合のユニセフという組織で募金活動をしているね。節電や食べ残しを減らすことが途上国の支援につながるなら、自分たちで実行して、それを全校に広めよう。家でも家族と話をしたいな。
・大きくなったら青年海外協力隊に応募してみたいな、それがだめでも、外国に行ったら、途上国のために何か自分にできることをしたいな。

今の日本の生活は世界の人々のおかげで成り立っているんだね。世界とのつながりの大切さがわかったよ。途上国の人たちのために自分のことをしたいな。

1 日時 平成24年6月26日(火) 第5時限 東田小学校 6の2教室

2 単元名 「東田海外協力隊」

3 単元の目標

- ・日本の途上国への支援や青年海外協力隊の活動に興味をもち、進んで調べたり、協力隊員の話を真剣に聞いたりしようとする。(社会事象への関心・意欲・態度)
- ・日本が途上国に行っている支援の意義や、国際社会の中で日本が果たすべき役割を考えることができる。(社会的な思考・判断・表現)

・地球儀や世界地図で日本が支援している国や日本に支援してくれている国の位置を確認するとともに、各国との貿易額や日本のODA額の推移をグラフから読み取ることができる。(観察・資料活用能力)

・日本が途上国にしている支援は、国際連合やNGO、ODAといった活動を通して行われていることを理解することができる。(社会的事象についての知識・理解)

4 単元設定の理由

(1) 児童観

本学級の子34名は、心が優しく協調性がある子が多い。5月に行われた校外学習では、1年生と豊橋公園まで歩いて行き、途中で疲れ果ててしまった1年生を励ましたり、荷物をもってあげたりする子の姿が多く見られた。また、入学式の準備では、男女が協力して素早くイスを並べることができた。一方で、まわりに気を遣うあまりに、子どもらしく大きな夢を語ったり、人目を気にせず活発に行動したりする子の姿はあまり見られない。優しさや協調性に加えて積極性が備わってくると、さらにより学級集団へと成長するだろうと思われた。

5年生時に学習した単元「食料生産とわたしたちの生活」では、わたしたちの生活が食料を生産する人々によって支えられ、多くの食料が外国から輸入されていることを多くの子が理解した。しかし、日本の貿易相手国としてアメリカ合衆国や中国、オーストラリアなどをあげる子がほとんどで、他にもたくさんの国々と日本がつながっていることに気づく子は少なかった。特に、開発途上国とのつながりに気づいている子はほとんどいない。また、今年度の5月に行った外国についてのアンケートでは、「外国に興味がある」と答えた児童が26名、「外国に行ってみよう」と答えた児童が20名だった。その理由として「外国の生活や食べ物に興味がある」「日本を出て、広い世界を見てみたい」という意見がある一方で、「外国にはこわい人が多そう」「外国には戦争があるし、銃をもっている」という意見もあり、外国に対して漠然とした不安を感じている子もいた。このことから、多くの子供は外国に対して興味をもっているが、自分とあまりかかわりがなく、知識もないことから、否定的な感情をもっている子もいることがわかる。また、子供にとって外国とは、アメリカ合衆国や中国のような大国であり、アフリカやアジアに多い開発途上国は、日本とかけ離れた国としてあまり認識されていない。

本単元では東日本大震災に対する世界各国の日本に対する支援をきっかけに、日本の開発途上国に対する支援に目を向けさせ、これからの日本の支援のあり方について追究していく。その中で、現在豊橋からアフリカに派遣中の青年海外協力隊員や豊橋市在住の青年海外協力隊OBとの交流を取り入れる。開発途上国のために誠心誠意働く人々の活動を知り、途上国支援の意義を考えることで、自分たちができる具体的な国際支援を考え、積極的に行動する子を育てたいと考えた。世界と日本とのつながりの大切さを知り、そのつながりをこれからも育んでいこうとする国際的な視野をもつようになてほしい。

(2) 教材観

○東日本大震災で日本を支援してくれた国々

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、復興支援のために日本は多くの国から援助を受けた。特筆すべき点としてブータン・スーザン・タンザニア・カンボジア・エチオピア・東ティモールなどの後発開発途上国と言われる所得水準の低い国からも日本に義援金が届いたことである。そして日本は、2011年においてスーダンを除いて、世界で最も多くの援助を受ける国になり、世界5位の援助国であると同時に、世界1位の被援助国になった。各国が日本を支援してくれる要因として、人道的な理由の他に、日本がODA(政府開発援助)という形で開発途上国を支援し続けてきたという事実があげられる。

○JICA(独立行政法人 国際協力機構) 青年海外協力隊

青年海外協力隊は今から40年以上前に始まった国際協力のための仕組みである。協力隊の試験に合格した隊員は福島二本松、長野駒ヶ根で訓練を重ね、開発途上国に2年間派遣される。隊員は派遣される国を選ぶことはできない。まず、途上国からの要請があり、それを受けたJICAが適材適所の人材配置をして協力活動が行われる。

この事業は JICA によって行われている。JICA によると青年海外協力の意義は3つある。一つは開発途上国との友好親善及び相互理解の深化である。二つ目はボランティアに参加する人が海外から日本社会をみて、日本の良さや課題を発見し自分自身の成長につなげる。三つ目はボランティア参加を通じて学んだことを帰国後日本社会に還元することである。開発途上国・ボランティア自身・そして日本社会のためにこの事業は行われている。

○ JICA の問題点と国際協力の課題

近年日本は不景気で、日本政府は約 8 9 2 兆円の負債を抱えている。そのため、公共事業の削減を求める国民の声もニュース・新聞等で多く聞かれる。日本の ODA 予算についても同様で、1997 年以降減少の一途を辿っている。その額は 97 年（最高額）を基準にすると、その 58% にしか満たない。民主党による事業仕分けでも JICA の事業が槍玉に挙げられた。さらに、東日本大震災の復興費用が加わり、「日本がたいへんな時に、外国に援助している余裕があるのか」という意見が国際協力を考えるシンポジウムでも多く寄せられた。日本の国際協力は大きなジレンマを抱えている。

○ 青年海外協力隊員 金田氏と OB の兵藤氏

金田氏は豊橋市出身で、現在アフリカのザンビアに派遣されている隊員である。29 歳の時に協力隊に応募し、退職をして、協力隊に参加した。勤務地はザンビアの中でも僻地の村である。かろうじて電気が通っているが、電波・ガス・水道がない中で小学校と中学校の理数系教師として働いている。日本での教員免許はないが、独学で勉強し英語で授業をしている。金田氏には、彼のもつ外国に対する強い好奇心と、途上国に対する教育の必要性を話していただく。

兵藤氏は中野校区で農業を営んでおり、20 年ほど前に、サモワに派遣された協力隊員 OB である。現在は豊橋市の協力隊員 OB 会の会長を務めている。協力隊や兵藤さんが考える途上国支援の意義について話していただく。

(3) 指導観

子供に国際協力の意義、世界の中での日本の役割をとらえさせ、共生社会への確かな認識と実践力を身につけさせるために、次のような手立てを考えた。

① 共生の重要性を認識するための学習活動の展開

ア) 東日本大震災に対する世界各国の日本に対する支援をきっかけに、日本の開発途上国に対する支援に目を向けさせ、これからの日本の支援のあり方について追究していく単元構成にする。子供の思考を意識し、疑問や追求したい点から次の問題が決まるようにするために、問題発見→予想→調べ学習→話し合い→感想での疑問→問題発見というパターンをもとに単元を構成する。

イ) 日本や開発途上国の現状、日本の国際支援のあり方が理解できるようにするために、日本が途上国に対して行っている ODA 額を地図で表した自作資料や、日本の ODA 額が年々減少している様子がわかるグラフなどを用意する。

② 友達とより深くかかわるための、個々の確かな足場づくり

ア) 個々の確かな足場をつくるために、インターネットや図書・自作資料を使った調べ学習を行ったり、青年海外協力隊員や OB と交流し、聞き取りを行う活動を取り入れたりする。現在、アフリカのザンビアで活動している隊員との交流は、インターネットを使ったテレビ電話である「スカイプ」を利用する。また、世界の白地図を GNI（国民総所得）別の色分けをすることで、先進国と途上国の所得の違いが目がいくような資料を教室に掲示し、地図帳や地球儀を常に教室に置き、いつでも国の位置や名称を確かめられるようにすることで、子供の思考を整理する。

イ) 個々が友達と多く話し合い、より深くかかわるようにするために、問題を追究する際に、グループで意見を出し合い、問題に対する予想を立てるようにする。グループの仲間の意見を聞くことで、多角的に問題を考えられるようにする。

③ 国際支援について、自分なりのかかわり方を考える場の設定

ア) 日本の国際支援を見つめ直すために、図書や JICA のホームページを使って、開発途上国では多くの人々が貧しい生活を送っている事実を知ると同時に、日本の財政の危機的な状況を資料を使って理解させる。

イ) これからの日本の国際支援に関して、自分なりのかかわり方を考えさせるために、途上国に対する支援の意義について考える場を設定し、日本に住む自分たちと世界とのつながりを気づかせるようにする。

4 研究の実践

東日本大震災によって被害を受けた日本に対する世界各国の支援をきっかけに、今まで日本が開発途上国に対して行ってきた支援に目を向ける子供

東田校区は、古くからの住宅街であり、6 年生の子どもも 3 世代同居の家庭が多く、学校には外国籍の児童が 1 人しかいない。5 年生の産業学習で、日本の貿易相手国について勉強はしてきたが、子供たちにとっての外国とは、アメリカ合衆国や中国などの大国であり、その他の国々についてはほとんど興味を示さなかった。また、6 年生になって行った「国名も知りアンケート」でも、知っている国をあげさせると、アメリカやヨーロッパの先進国を多くあげた。「外国に行ってみたいと思いますか?」という質問には、クラス 3 4 人中 1 9 人が「はい」と答え、1 3 人が「いいえ」と答えた。その理由を尋ねると、「言葉がわからない」「外国の人はこわい」「戦争がある」という否定的なイメージで外国を捉えていることがわかった。このような子供の実態から、本単元では子供の外国に対する見方を変え、持続可能な社会とは何か考えさせる学習の必要性を感じた。今の日本の生活は先進国だけではなく、開発途上国との関わりなしには成立しないことに気づき、そのつながりを大切に思う子供の姿を目指した。

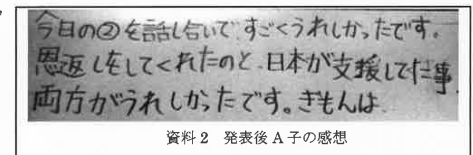
単元に入る前の道徳で、フィリピンのゴミ山を漁る自分たちと同じ年の少女や、モンゴルのマンホールで暮らす子供たち、ソマリアの飢餓で苦しむ人々の存在を知り、子供たちは大きなショックを受けた。子供たちは初めて世界に開発途上国と呼ばれる経済的に貧しい国が存在することを意識した様子だった。

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災により日本は多くの被害を受けた。クラスの子供たちにとっても衝撃は大きく、学校生活の中でもよく話題になった。そこで単元の導入として「東日本大震災で日本を助けるために何かしてくれた国は何カ国くらいだろう」と問いかけ日本と外国とのつながりに目を向けさせた。子供は「10ヶ国くらいじゃないかな」「いやいやそんなに少なくないよ30ヶ国くらいじゃないかな」と予想を話し合った。実際に外務省のホームページで日本を助けてくれた国の数を数え、用意した白地図にシールを貼っていくと、ほとんどの国にシールが貼られることになった（資料 1）。合計を数えると、約 160ヶ国もの国が日本のために何らかの支援をしていていたことがわかった。子供たちは、自分たちの予想を大幅に上回る数の国が日本を支援したことを知り、「こんなに多くの国が日本のために何かをしてくれてうれしい」という素朴な感想を記した。そして、「被災地のためにどんなことをしてくれたのかな」「道徳で見たフィリピンやモンゴルのような国まで、日本のために支援をしてきているよ。自分の国がたいへんなのになんでだろう」という疑問を抱くようになった。

上記の 2 つ疑問について外務省や JICA のホームページで調べて行く中で、子供たちは、開発途上国の人々の「今までの日本の支援に感謝している」「今度は我々が日本のために恩返しをする番だ」という言葉に気がついた。意見発表後の感想では（資料 2）の A 子のような「開発途上国が恩返しをしてくれたこと、日本が開発途上国に支援していただいたことがわかってうれしい」という意見が多く挙げられた。さらに授業後の感想では、「日本は今まで開発途上国にどんなことをしてきたのかを調べたい」という意見が多く見られたため、子供の興味は日本が今まで開発途上国のためにしてきた支援に向いていった。東日本大震災で日本を助けてくれた国を調べる活動を通して、子供たちは今まで日本が途上国に対してしてきた支援に興味をもつようになった。



資料 1 日本を支援してくれた国を探し、シールを貼る子供たち



資料 2 発表後 A 子の感想

グループと学級で意見を交流し、問題意識をはっきりさせる子供

「これまで日本は開発途上国にどんなことをしてきたのか」という疑問を抱いた子供たちの問題意識をより明確にするために、グループで疑問に対する予想を話し合わせ、その後、全体でグループの意見を発表させることにした。子供たちは一人一人が自分の意見を発表し、それをグループに与えたホワイトボー

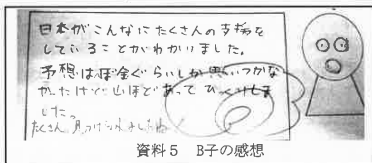
ドへ書き込んでいった（資料3）。子供たちはテレビで観たことや今までの経験から「日本は赤い羽根やユニセフのような募金をして貧しい国にお金を送っているんじゃないかな」「テレビで芸能人が貧しい国に学校を建てているのをみたよ」「ボランティアで多くの人が開発途上国に行っているんじゃないかな」ということを予想した。全体での発表では、それぞれの班の予想を真剣に聞き、自分たちのグループとの共通点や相違点に興味をもつ子供の姿が見られた。（資料4）予想を話し終えた子供からは「早く確かめたい」という言葉が聞かれ、調べ学習に対する意欲が高まっていた。（資料5）のB子らの感想からも、話し合いを通して自分の問題意識をはっきりさせたことで、調べ学習への意欲が高まっていたことがわかる。



資料3 予想をグループ話し合いホワイトボードにまとめる子供たち



資料4 グループでの予想を全体に発表する子供たち



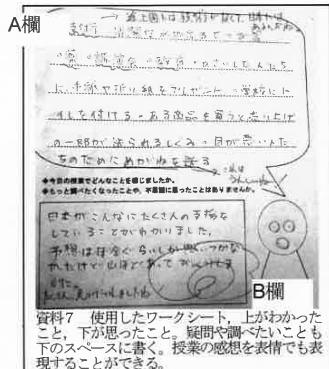
資料5 B子の感想

図書やインターネットを使って調べたことから自分の考えをまとめ、友達との交流を通して、共通の課題をつくるために、ワークシートを活用する子供

日本が開発途上国にどんなことをしてきたのかという問題意識をはっきりもった子供たちはコンピューターや中央図書館から借りてきた本を用いて調べ始めた。調べ学習に際しては、出てきた国の位置を確認させるために、地図帳と地球儀をグループに一つ用意した(資料6)。そして、子供たちには一人一枚ワークシートを与え、そのA欄にわ

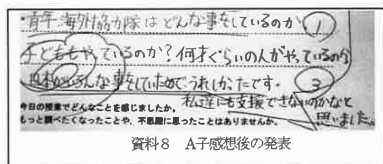


資料6 地球儀で国の位置を調べる子供



資料7 使用したワークシート，上がわかったこと，下が思ったこと。疑問や調べたいことも下のスペースに書く。授業の感想を表情でも表現することができる。

たちの意見をまとめると「①青年海外協力隊って何だろう？（資料8）」「②なんで日本は開発途上国を支援しているのか」「③どういう国にどれくらいのお金を支援しているのか」「④私たちにもできることがあるんじゃないかな（資料8）」の4つに分類することができた。そこで、今後の学習はこれらの課題を追求していくことにした。



資料8 A子感想後の発表

実際に開発途上国のために働いている青年海外協力隊員や隊員OBの話を聞き、日本と外国とのかかわりをより身近に感じる子供

調べ学習後の交流で出てきた青年海外協力隊という言葉に多くの子供は興味を抱くようになった。発表では「開発途上国に行って、その国のために活動をする」という曖昧な意見だったため、子供たちはその実態について知りたいという思いを強く抱いていた。そこで一時間青年海外協力隊についての調べ学習の時間を取った。調べ学習では、青年海外協力隊はJICAという組織から2年間開発途上国に派遣されること

や、日本のODA（政府開発援助）で派遣されていること、豊橋市からも多くの人が派遣されていること、教師、農作業指導員など様々な職種があることがわかった。豊橋市のHPには、隊員からの便りというページがあり、子供たちはそこ



資料9 ザンビア隊員金田直己さん

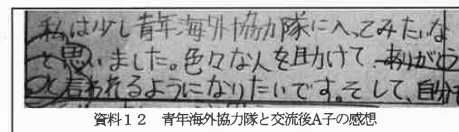


資料10 スカイプを使いコミュニケーションをとる子供たち



資料11 サモワでの活動を説明する兵藤さん

で、ザンビア共和国に理数系教師として派遣中の金田直己さんという方の現地レポートに担任の山本が載っていることを発見した。担任の山本と金田さんは中学からの友人であることを話すと、子供から金田さんと話をしたいという意見が出たため、交流するためにスカイプを用意した。金田さんと電話で連絡をしてスカイプができるか確認をしたところ、電波の状況が良ければ可能だとわかり、実際にスカイプでの交流会が行われることになった（資料9, 10）。交流会では金田さんからザンビアの実情や開発途上国で働くことのやりがいや苦労について聞くことができた。そして、もっと他の隊員の人からも話を聞きたいという意見が出たため、金田さんから紹介していただいた豊橋の青年海外協力隊OB会会長である兵藤さんからも話を聞くことができた（資料11）。金田さんとは全く異なる国、サモワで農作業指導員として働いていた兵藤さんの話を聞き、子供たちは一口に協力隊と言っても、仕事の内容や苦労は全然違うのだということを知ることができた。2人の協力隊員の話を聞いた子供たちの感想からは、自分たちのもっていたアフリカに対するイメージとの違いについての驚きや、開発途上国の人たちに働いて喜んでもらうため

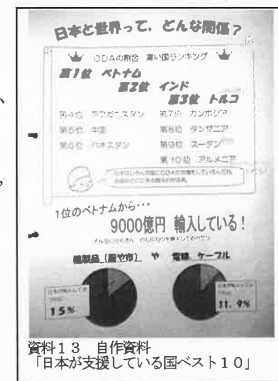
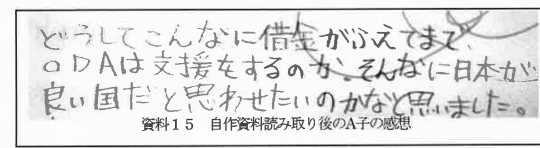


資料12 青年海外協力隊と交流後A子の感想

日本の現状、日本の国際支援のあり方を理解しようと自作資料を活用する子供

交流を終えた後、子供たちは日本が開発途上国を支援する理由を調べ始めた。子供たちは当初、青年海外協力隊員の話から、人間の善意、人と人との助け合いで開発途上国支援が行われているという予想を立てていたが、JICAや外務省のホームページで調べ学習を進めていくうちに、日本は開発途上国とのつながりがなくと現在の豊かな生活を送ることができないことに気づき始めた。開発途上国の貧しい人々を助けるための支援だと思っていたが、途上国支援は日本のためでもあることを知り、多くの子が意外に思った。

また、日本がどういう国に、どれくらいのお金をだしているのかに興味をもつ子供がいたため、子供の問題意識に沿った自作資料を用意することにした。(資料13)日本がODAでお金を出している国は輸出入で関係の深い近隣

資料14 自作資料
「東日本大震災による日本の危機」資料13 自作資料
「日本が支援している国ベスト10」

資料15 自作資料読み取り後のA子の感想

資料 1.4 自作資料
「東日本大震災による日本の危機」

5年前の世界第一位の時と比較すると現在はその58%しかないと
知ることになった。子供たちの感想から「開発途上国への支援は困っ
ている国を助けるだけでなく、関係が深いから支援をしていることがわかった」や「なぜ日本の開発途上

国支援の金額が減っているのだらう」と感じていることがわかった。

そこで「なぜ日本の開発途上国支援の金額が減っているのだらう」という問題意識に沿った自作資料(資料14)を用意した。日本には国の公債残高が約709兆円もあること、一年間に使えるお金は約90兆円しかないこと、社会福祉のために消費税が増税されるかもしれないことがわかった。さらに、東日本大震災の復興にかかる金額が約20兆円だということを知り、子供たちは衝撃を受けた。(資料15) A子の資料読み取り後の感想からも、日本の現状に対する不安感や、今まで開発途上国を支援することはよいことで続けるべきだと考えていたA子の考えが揺れている様子が見られた。

開発途上国では多くの人々が貧しい生活を送っている事実や、日本の財政の危機的な状況といった現状をふまえたうえで、日本の国際支援を見つめ直させ、自分なら何ができるかを考える子供

「日本がこんなに困っているのに、開発途上国を支援していいのだろうか」というA子の疑問はこれからの日本の国際支援のあり方を考えさせるために重要であると考え、「日本は、開発途上国支援をどうすべきなのか」という共通の課題を設定した。これまでの学習から、開発途上国を支援する理由は人道的な面だけでなく、日本のためでもあるということをお子に理解していた。そのため、ワークシートに自分の考えをまとめさせると、全ての子が開発途上国に対する支援は続けるべきだという意見になった。しかし、内容を詳しく見ていくと多くの対立点や相違点が見られたため、話し合いの場を設け子供の考えを整理し深めることにした。また、支援には多額の税金が使われていることから、納税者である家族に開発途上国支援を続けることについてどう思うのか取材をさせることにした。この課題に対する子供たちの考えは大きく5つに分けられることができた。一つは、開発途上国支援は日本のためなので、このまま続けるべきだという意見。二つ目は、開発途上国はお金がなく困っているから、比較的裕福な日本はこのまま支援を続けるべきだという意見。三つ目は、支援の金額は減ってしまうかもしれないが、日本のために、このまま続けるべきだという意見。四つ目は、支援は続けるべきだけど、金額は減らさないとけないという意見。そして五つ目は、支援の方法を考え直し、お金から、技術を教えるような支援にすればよいという意見がでた。A子は授業開始前、支援は一旦停止して、日本の借金を返してから支援を再開するべきだという意見だったが、C1、C2の意見を聞いて開発途上国の立場にたって、支援を考える事ができるようになった。(資料17)(資料18)そして、話し合いの流れは開発途上国に対する支援は減ってしまうかもしれないけれど、続けていかなければいけないねという考えにまとまってきた。しかし、途上国に対する支援は、日本のために行うべきなのか、開発途上国のために行うべきなのかという点で、子供たちの意見は対立していた(資料17C3・C4)。そこで、自分ならどのような選択をするのか考えさせるために、「国民一人あたりが払う年間の支援金額は約6000円です。あなたなら日本のために使いたいのか、開発途上国のために使いたいと思う。」と問い返した。この切り返しに対し、子供たちは自分の言葉で話し合いを始めた。日本が開発途上国を支援する目的をJICAや外務省のホームページで調べたとき、多くの子は貧しい国の人々のためではなく、日本の生活のために支援をしている事実を知り驚いていたが、話し合いでは(資料17C5)のような意見も出てきた。この話し合いが一つの方向にまとまることはなかったが、話し合

資料17

「開発途上国に対する支援はどうすべきなのか」
A子 支援は一旦停止して、日本が借金を返済し終わってから再開した方がいと思う。
C1 そんなことをしてしまうと、今困っている途上国の人は急に日本からの支援がなくなって死んでしまうかもしれないよ。

C2 減らすのは仕方ないと思うけど、一旦停止するという考えは途上国の人が困ってしまう。

C3日本は借金が多いから貿易でかわりの深い国にたくさん支援して、開発途上国への支援は減らせばいい。

C4 ぼくは仲のいい国より、一人あたりのかせぐお金が一番少ないアフリカにあるブルンジのような国に支援したい。

T1みんなだったら、自分の大切なお金を本当に困っている国が、かわりの深い国が、どちらに使って欲しいですか。

Y男 国としては日本とかかわりの深い国に支援してくれないと、ぼくたちの生活が困ってしまう。でも、ぼく個人としては、本当に貧しい国に何かできることをしたいという気持ちがある。

C5 ODAのそもそもの目的は世界を平等にすることだと思う。だから私は貧しくて困っている国にお金を送るべきだと思う。

私の意見は変わりません。でも他の人達の意見を聞いて、少しづつでも支援した方がいいのかなと思ったり。

資料18 話し合いを終えて表情が見られる A子の感想

あたりが払う年間の支援金額は約6000円です。あなたなら日本のために使いたいのか、開発途上国のために使いたいと思う。」と問い返した。この切り返しに対し、子供たちは自分の言葉で話し合いを始めた。日本が開発途上国を支援する目的をJICAや外務省のホームページで調べたとき、多くの子は貧しい国の人々のためではなく、日本の生活のために支援をしている事実を知り驚いていたが、話し合いでは(資料17C5)のような意見も出てきた。この話し合いが一つの方向にまとまることはなかったが、話し合

い終盤でY男が「国としては開けりの深い国を支援するべきかもしれないけれど、ぼく個人としては貧しい国に何かできることをしたい」という意見が出た時に「私も自分にできることを考えたい」と反応する子の姿が多く見られたため、次からは私たちにできる国際支援を考える事にした。

調べ学習の後の話し合いで、子供たちは①給食を残さない(残食を減らす)②開発途上国に服や靴などを送る③ベルマークを集めて、開発途上国に送る④エコキャップを集めて開発途上国にポリオワクチンを送るという意見が出された。(資料19)のA子の感想からも、世界の開発途上国に対して、ベルマークやアルミ缶を集めて支援したいというA子の強い思いが読み取れる。複数の意見が出たためみんなで分担することにした。A子は給食の残食を減らすというチームに所属した。A子のアイディアはグループの中でも生かされ、学校全体を動かすキノコ(給食を、残さない、子になる)キャンペーンを企画し、実行した。また、B子はエコキャップを集める活動に取り組み始めた。B子は近所のスーパーや薬局に頼れば多くのキャップが集まるかもしれないと考え、自ら店に行き店長と話をし、店でエコキャップを集める許可をもらってきた(資料20)。内気だったB子が自分たちにできる国際支援についての話し合いを通して主体的に活動するようになった。

5 研究の成果と今後の課題

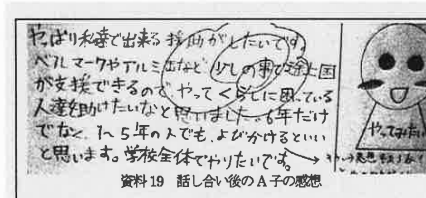
(1) 手立ての検証

① 共生の重要性を認識するための学習活動の展開
東日本大震災が発生し、様々な国が日本のために多様な支援をしてくれたという事実を知ることができたA子はその感想で(資料2)のような国と国との助け合いについて喜びの感想を書いている。また、B子の感想にも東日本大震災で支援してくれた国々に対する喜びと、世界の人々が助け合って生きていることへの驚きが表現されている。(資料21)子供たちに強い印象を残している東日本大震災での世界からの支援を導入で取り入

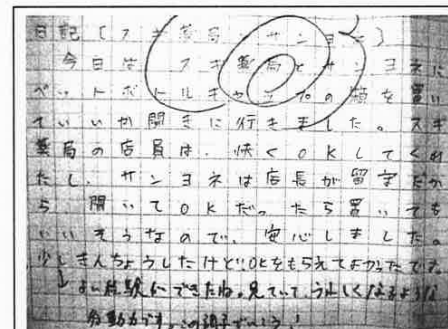
れたことで、日本と世界とのつながりを意識させることができたと考える。

青年海外協力隊員との交流では多くの子が開発途上国で働く協力隊員の活動に強い興味をもった。

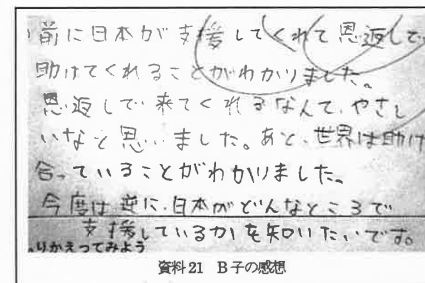
子供たちは、金田さん、兵藤さんの話から、つらいこともたくさんあること、そして、開発途上国で困っている人のために働くことの意義を考えることができた。(資料12, 22)「開発途上国支援に対する支援はどうすべきなのか」の話し合いでは、日本と世界のつながりを考え、共に助け合っていくことの大切さを意識している意見が見られた。このような姿が見られたことから、手立て①が有効だったと考える。



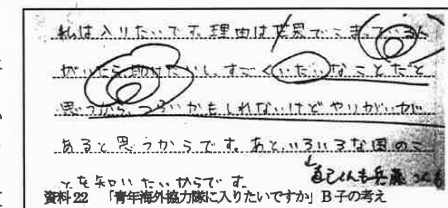
資料19 話し合い後のA子の感想



資料20 B子の日記



資料21 B子の感想



資料22 「青年海外協力隊に入りたいです」 B子の考え

② 友達とより深くかかわるための、個々の確かな足場づくり

海外、特に開発途上国は、単元を始める前の子供たちにとっては未知の世界であった。そのため、世界の国の位置やその特徴を知るために、地球儀、地図帳、教室掲示（資料23）で常に外国を意識できるような環境を作り子供の意識を高めた。そして、友達とより深くかかわるために、課題の前にはグループ予想をし、調べ学習後にはワークシートに朱書きを行った。B子の調べ学習の感想（資料7）には自分の予想とのギャップに驚いている様子が記されている。この驚きが次の調べ学習への意欲の



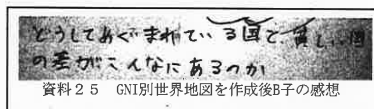
資料23教室掲示（ザンビアの生活）

向上につながった。調べ学習後には意見を交流する時間を取り、その感想から新たな課題をつくった（資料8）。また、子供の問題意識に沿った自作資料を用意することによって、個々の確かな足場づくりを行った。（資料13、14）B子の感想（資料24）には、日本が150ヶ国を超える国にODAで支援していた事実や、その金額を知っての驚き、日本の公債残高を知っての危機感が記されている。これが「開発途上国支援をどうするか」の話し合いにおけるB子の考えの根拠の一つとなっていた。調べ学習に真剣に取り組む姿、ワークシートにたくさんの事実や思いを書き込む姿（資料7）、話し合いに積極的に参加する姿

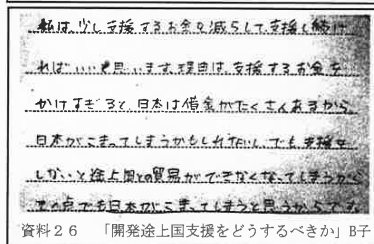
（資料17）から、手立て②が有効であったと考える。

③ 国際支援について、自分なりのかかわり方を考える場の設定

本実践では、開発途上国の人たちの中には貧しい生活を送っている人たちがいること、日本の財政が危機的な状況であることをふまえた上で、日本の国際支援を見つめ直させた。B子は（資料25）にあるように、世界には経済的に豊かな国と、貧しい国があることを知った。そして、（資料24）で日本の現状を理解した。両者の立場を知った上で、B子は日本の国際支援の金額を減らしながら続けるべきだという結論に至った。（資料26）減らす理由とし、日本の公債残高を上げ、続ける理由としては、途上国との関係が悪くなると貿易ができなくなり日本が困ると考えた。このことからB子は日本の現状だけでなく、日本の未来についても思いを巡らしていることがわかる。また、私たちにできることはどんなことがあるだろうと投げかけ

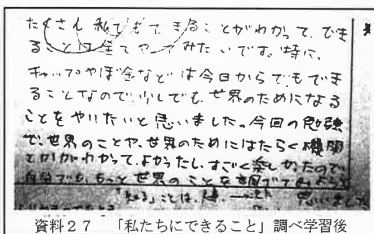


資料25 GNI別世界地図を作成後B子の感想



資料26 「開発途上国支援をどうすべきか」 B子

ると（資料27）にあるようにB子は、「私にもできることがあることがわかった。少しでも世界のためになることをやりたい」「これから自分でも、もっと世界のことを調べたい」と考え、（資料20）にあるようにエコキャップについて調べ、実際に行動を始めた。A子をはじめ（資料19）、他の子たちも自分たちにできる支援を考え始めていった。以上のように日本の開発途上国支援をどうすべきか話し合うことによって、国際支援について自分なりのかかわり方を考える子供の姿がみられた。



資料27 「私たちにできること」調べ学習後

（2）今後の課題

本実践では今まで、豊橋市立小学校社会科研究部で実践してきた地域教材とは異なり、東日本大震災や青年海外協力隊、ODAを教材として扱った。ODAや青年海外協力隊の目的・意義は立場によって考え方が大きく異なるため、自作資料を与える際には事実を重視した資料を与えた。事実を元に子供の思考を深めるために、更なる教材研究の必要性を感じた。世界とのつながりなしには今の日本の生活は成り立たない。今回の実践を通して持続可能な社会の重要性を改めて感じた。これからもそのような社会の実現を目指すための実践を研究していくことが今後の課題である。